



地域の底力——岐阜県美濃市

地域の伝統を守り 未来を見据える 「うだつの上がるまち」 岐阜県美濃市

一三〇〇年の歴史ある美濃和紙を要に、
大切に受け継いできた文化を今、
まちの誇りとしてあらためて発信。
岐阜県美濃市は次の千年を思い、
さらなる地域の活性化をはかる。

大切に受け継がれてきた 誇れる美濃の伝統文化

岐阜県中央部に位置する美濃市のまちとしての骨格作りは、関ヶ原の戦いでの功績により飛騨高山藩初代藩主となった金森長近が一六〇五年に隠居し、長良川沿いに小倉山城を築いたことに端を発する。その後尾張藩領となった後も、市内を流れる長良川が人や物資、そして文化を運び、まちの繁栄に寄与してきた。

約四〇年に及ぶ岐阜県庁での勤務を経て二〇一四年から市長を務めている武藤鉄弘氏は、自らの故郷でもある地元への思いを語る。「美濃市には、数々の誇るべきも

金森長近が建てた小倉山城跡は現在「小倉公園」として市民の憩いの場に。まちなかや長良川を眺める格好のビューポイントであり、春は約一〇〇〇本の桜で彩られる。



のがあります。しかしながら外から見てみると、地元の方がそれを誇りと思わず、生かし切れていないのではないかと感じ、そうした状況を何とかしたいと思っ

ていたんです。その後、市

長として市民の皆さんと接するうちに、非常に心が豊かで文化力が高いなどの印象を持つようになりました。いろいろな取り組みに対して協力的で、市民の力も感じています」

武藤氏のいう美濃市の誇りの代表格が、美濃和紙だ。東大寺正倉院には

八世紀にこの地域一帯でつくられたといわれる和紙が収蔵されており、少なくとも一三〇〇年前には美濃周辺で手すき和紙文化があったことが明らかになっている。

「本美濃紙の技術が二〇一四年にユネスコの無形文化遺産となり、さらには二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックの表彰状に美濃手すき和紙が採用されました。市民の皆さんがそのすばらしさをあらためて認識するようになったのはうれしいことです」

その和紙や原料を扱う商家をはじめ、江戸時代から大正時代にかけて建てられた家々が残るかつて

の城下町もまた、美濃市の誇りだ。一九九九年には国から「重要伝統的建造物群保存地区」の認定を受け、電柱の地中化整備などが進められてきた。

その事業が進められた理由のひとつに、人口減があると武藤氏は語る。現在の美濃市の人口は約二万



1916（大正5）年竣工。現存する吊り橋では日本最古とされる橋長113mの「美濃橋」。国指定重要文化財。現在工事中。





左上・左下／「うだつの上がるまち」目当ての観光客の姿も見られる重要伝統的建造物群保存地区。もともと防火目的だったうだつはやがて、家の繁栄を表すようになり、「うだつが上がる」の語源になった。右／江戸時代の町医者者の住居を利用し、和紙やちぎり絵の作品を展示する「町並みギャラリー山田家住宅」など、古民家を利用した観光施設がまちなかに点在する。



人。約三万人を数えた一九五五年以降、減少が続いている。「人が減れば、商いが滞ります。市民を相手にするだけでは地域は活力を失う。ならば利便性や生活を維持するために外から人を呼ぼう、海外からの旅行者を含めた観光産業に力を注ごう」という発想です」

それぞれの住民が歳月を経た家を大切に思い、暮らしてきたからこそ、重要伝統的建造物群保存地区として認められたと武藤氏が話す古い町並みは現在、「うだつの上がるまち」として注目を集めている。「うだつ」とは江戸時代に屋根の両端に設けられた防火壁のことで、今でもまちの随所に見られる。富裕の象徴ともいわれ、豪商たちがかつてその美しさを競い合ったという。

当初、観光産業を推し進める上

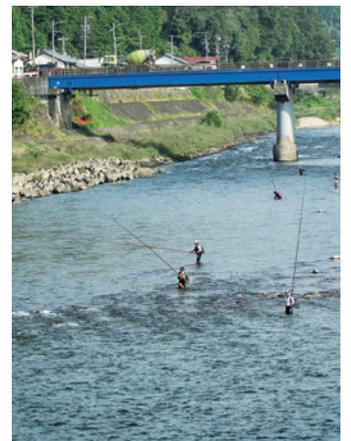
での課題は、宿泊施設や飲食店の不足だった。しかしながら古民家を活用したホテルの誕生や、寄贈された古民家を市が整備し、商業施設として無償で貸し出す官民が連携した取り組みの開始により、人の流れや思いは変わりつつあるという。

長良川の水の良さを生かし 旨し酒造りを目指す

重要伝統的建造物群保存地区の一角には、安永年間初期の建築で国指定重要文化財となった一七七二年創業の小坂酒造場がある。美濃市に残る唯一の酒蔵。二代目を担う代表取締役の小坂善紀氏は、代表銘柄「百春」についてこう語る。

「赤だしみそが食生活を支える岐阜県の酒は全般的に濃いといわれますが、うちはとりわけしつかりした味わいです。仕込みに使われるのは長良川水系の地下水。長良川は肥沃な土壌を流れるため、ミネラル分が豊富で発酵が進みやすく、香りも出やすいという特徴があるんです」

小坂酒造場では長年にわたり、



越後杜氏や南部杜氏を招いて酒造りを行っていたが、後継者不足の問題などから蔵人（酒蔵の醸造職人）のひとり杜氏を務めることとなり八年目を迎えたという。

「二〇〇年もの長い間商いを営んでいると、そういう困難や変革の時期が必ずあるのだと思います。日本酒の売り上げは、昭和五十年代がピークで、今は一番大

変なとき。一方で各蔵の味わいが

百花繚乱で、こんなに個性ある日本酒が飲める時代はないと思います。幸い、うちは杜氏が旨い酒を

造ってくれていますから、トレンドを気にしすぎることなく、これからの個性ある酒を地道に造り、ほかの酒との差別化を常に図っていきたいと思っています」

試飲した仕込み水はやわらかで



かつて美濃市内に複数あった酒蔵は現在、小坂酒造場のみ。代表取締役の小坂善紀氏は、岐阜県内のほかの酒蔵とともにイベントなどに参加し、PR活動に努める。



上／鮎釣り（あや釣り）で知られる長良川は、水の供給源として市民の暮らしを支える一方、子どもたちにとっては格好の遊び場。市長の武藤氏は「美濃市民の生活の一部」と語る。下／1910（明治43）年築、長良川流域ではもっとも古い歴史を誇る「長良川発電所」。国登録有形文化財。



右／令和元年全国新酒鑑評会で金賞を受賞した代表銘柄「百春」と、低農薬栽培の酒米で仕込む「さんやほう」。下／1772（安永元）年築とされる建物は、職人技が生む曲線を描いた「むくり屋根」がその特徴のひとつ。右端はうだつ。



甘みがあり、酒もまた懐深いふくらみを感じられるおいしさ。和食に限らず、洋食や中華料理とも相性が良さそうな印象だったが、実際、小坂酒造場の酒は中国、スイス、フランスに輸出されているという。また二〇一八年には国際的なワインコンクール「IWCC（インターナショナルワインチャレンジ）」の「SAKE部門」で銀賞、銅賞を受賞したのに加え、二〇一九年十月には、日本酒人気が高まるパリのイベント「サロン・ド・サケ」に出展するなど、海外で高い評価を得ている。

地元に向けては二〇〇四年から

毎年蔵開きが行われ、また、例年六月に開催される日本酒を使用した梅酒づくりも人気の的だ。通常でも蔵の一部は見学が可能で、美濃を訪れた観光客の多くが立ち寄る。

「まちづくりという特別な意識はありませんが、われわれが酒を造り続けること自体が観光につながるのかなど。目先のことにはとられすぎず、将来を見据えてしっかりと構えていかななくてはならないと思っています」

小坂氏は控えめに語るが、「百春」の旨さは、味わたった人と美濃を結び架け橋になるような気がした。

先人の知恵が救った 伝統芸能を未来へと継ぐ

美濃市が一年でもっともにぎわうのは、江戸時代の雨乞いをルーツとする四月の「美濃まつり」だ。桜色に染めた美濃和紙で飾った三〇基ほどの「花みこし」や山車、練り物などがまちを華やかに盛り上げる。その祭りに欠かせないのが、国選択無形民俗文化財の即興劇「美濃流し仁輪加」。町内会が

上／岐阜県美濃加茂市美濃太田駅～郡上市北濃駅間を結び、長良川の眺めを楽しめる長良川鉄道。重要伝統的建造物群保存地区は美濃市駅から至近距離だ。下／奈良時代創建といわれる「洲原神社」は、かつて美濃国における白山信仰の要的存在だった。



母体となった一五団体によって行われていると語るのは、美濃市仁輪加連盟副会長の中村辰也氏だ。

「仁輪加は江戸時代に大阪や京都をはじめ広く見られた大衆の娯楽で、美濃には天保年間（一八三〇～四四年）の頃に入ったといわれています。現在も各地にその名残はありますが、美濃市仁輪加連盟のような保存団体が存在し、そ

の伝統文化が継承されているのは、全国でも数少ないようです」

祭りの夜、美濃流し仁輪加は、笛、鼓、三味線、リヤカーに乗せた太鼓などを演奏しながら町を練り歩く。決められた会場で披露される寸劇では、時に社会を風刺しつつ「地口落ち」という同音異義語を重ねた落ちで笑いを取る。昔ながらの言葉が使われるため、失



上／満開の桜を彷彿とさせる花みこし。和紙でできた花は、ひとつひとつ手作業で染められる。下／町の辻々で演じられる美濃流し仁輪加。笑いを誘うその展開には、話題性の高いニュースが盛り込まれることも多い。（写真提供：美濃市）

美濃市仁輪加連盟副会長の中村辰也氏は、コンクールにおいて多数の優勝回数を誇る町内会で脚本を担う仁輪加作家でもある。お話を伺ったのは江戸時代に建てられた商家で、市指定有形文化財の「旧今井家住宅・美濃史料館」。



われつつある方言の保存にも一役買ってきた。その一方で、伝統の継承と人材の確保が課題だと中村氏は話す。

「かつては美濃和紙で財をなした旦那衆が、お金と運営の両面で仁輪加を支えてきました。娯楽の多様な影響から一時期は途絶えていた地区もありましたが、昭和四十年代に『仁輪加コンクール』が始まり、地区で出来を競い合う土壌ができたことで、現在まで残ってこられたのだと思います。お囃子や言い回しの工夫や研究も進み、地区ごとに特色があります。今後、こうした伝統文化を守りつつ、いかに若い世代に興味をもってもらうか、あらたに考えていくのがわれわれの役目だと思っています」

現在、美濃市では小学校の授業に仁輪加が取り入れられている。また、仁輪加を演じるのは成人の男性に限られるが、囃子やリヤカー引きなどには女性や子どもたちも参加させるなど、時代に即した柔軟な対応が進みつつある。

二〇一九年十一月には、文化庁の補助事業として東京で開催された「全国民俗芸能大会」で、美濃流し仁輪加が演じられた。大舞台への招聘と客席からの拍手は、関係者の活力になったに違いない。

オリンピックの追い風のなか 努力を重ねる美濃和紙職人

美濃流し仁輪加をはじめとする祭りやまちの繁栄と文化を担ってきた和紙産業もまた、後継者不足の問題を抱えている。現在、手すき和紙職人は約二〇名。その多くが、美濃和紙に魅せられて他所から移住した方々。岐阜県笠松町出身の家田美奈子氏の場合は、日本画を学んでいた学生時代に素材と

なる和紙に興味を覚え、美濃和紙の魅力に惹かれたのが人生の転機になった。

「和紙は産地によって特徴が異なります。日本画で通常使われる越前和紙が厚めなのに対して、美濃和紙は薄くて透かしたときにコウゾの樹皮の繊維がとともきれいで印象に残りました」

家田氏は本美濃紙保存会会長の和紙職人澤村正氏のもとに弟子入りし、四年間の修業を経て二〇〇〇年に独立した。

「今でこそ一年中紙すきは行われますが、かつては冬場、冷たい水を使うつらい作業。稼ぎのいい生業でもありませんから、子どもたちに家業を継がせなかつた職人も多かったと聞きます。だからこ

そ私のような外から入ってきた職人も多く、それが美濃和紙に新しい風をもたらしているという面はあると思います」

季節や気温など環境により、紙をすく舟の状態は異なるため、調整して均一にする必要がある。最終的な仕上げは、干してみなければわからない難しさもあると家



右／アート展での受賞作品などを展示する「美濃和紙あかりアート館」の作品。下／紙すき用の舟。コウゾと水、トロロアオイを入れ、竹箆で舟の中の液をすくって揺すり、一枚ずつ紙をすいていく。



毎年10月に開催される美濃和紙あかりアート展は、隣の関市で日中に開催される「刃物まつり」と連携し、集客をはかる。(写真提供：美濃市)



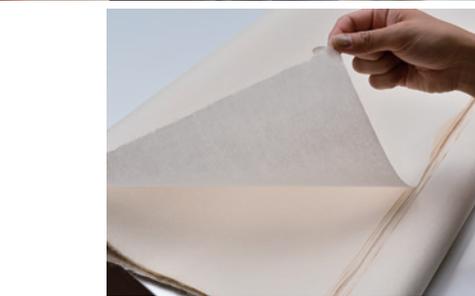


左／美濃和紙職人の家田美奈子氏と、繊細な美しさをたたえた作品。1日にすくのは80～150枚で、前後の作業を含めると完成まで2週間程度要する。下／和紙づくりの工程のひとつ、コウゾの「ちり」と呼ばれる黒皮や変色した部分を流水のなかで取り除く「ちりとり」。



田氏は話す。「思った通りの紙がすけない、もう一掃りすればよかったということは、今でもあります。どうすればよかったのかと考える。その繰り返します」

家田氏によれば、そんな手すき和紙の未来を切り拓くため、地元ひらの小学生が和紙づくりを学び、卒業証書を自分ですく取り組みが行



われているという。毎年十月、古い町並みを和紙の灯籠が飾る「美濃和紙あかりアート展」での手すき実演をはじめ、国内外のワークショップ、イベントなどにも職人が参加するようになった。

「私は子どもがいるので行けませんでしたが、イタリアやイギリスに赴いた職人もいます。海外の人は和紙にさわったこともないので、その質感に驚かれたようです。職人としても尊敬しますと言われた、との話を聞きました。その昔、職人は紙をすくだけで済みましたが、今は、私も含めて多くの職人がお客様から直接注文を受ける等、販売も手がけています。伝統を守ることも必要ですが、『こんな紙をつくってよ』という気軽なコミュニケーションもできるよ

う、少しずつ商いのやり方を進化させていく必要もあると思っています」

家田氏は、顔料などを用いた和紙の加工も手がけているとか。穏やかながら、その口調には、自分が惹かれた美濃和紙を多くの人が手に取り、その良さを実感してほしいという思いが感じられ、感慨深く胸に刻まれた。

多角化経営で目指すのは 住み続けられるまちづくり

ピーク時の明治時代には大小三〇〇〇～四〇〇〇軒あった手すき和紙の業界も、ライフスタイルの変化や洋紙・プラスチックなどの台頭による和紙の需要低下等により、今では二〇人ほどまで職人が減った。しかしその逆境に極めてポジティブに立ち向かっているのが、機械すき和紙を手がける丸重製紙企業組合代表理事の辻晃一氏だ。

東京と名古屋でのベンチャー企業勤務を経て、二〇〇九年に家業を継いだ後、辻氏が自らに課したテーマは「美濃と和紙を元気にする」。SNSで自社の情報発信を徹

底した上、職人による工房への案内や工場見学の実施を重ねたことが、旅行社による美濃和紙ツアーの開催にまで至った。二〇一三年には、毎年美濃和紙あかりアート展に合わせて和紙や加工品の販売を行う「みの紙まつり」をスタートさせた。

二〇一九年七月には県外の企業と提携して市から古民家を借り、宿泊施設「NIPPONIA 美濃商家町」をオープン。「世界に美濃和紙を発信したい」との思いから、当ホテルの施設内に多彩な和紙をそろえた和紙専門店 Washinary も営むようになった。

それに先立つ二〇一七年には、電力会社「みの市民エネルギー」を設立。現在は日本卸電力取引所から仕入れをしているが、将来的には地元のクリーンエネルギーの地産地消モデルを作る計画がある。美濃和紙の手すき職人、機械すき事業者だけではなく、原料となるコウゾやトロロアオイの栽培者も減少する状況を危惧する辻氏



ラフティングやカヤック、川原でのバーベキューなど、長良川はアウトドアの場としても人気。今後、さらなる誘客を目指すための、観光コンテンツとしても期待される。



上／辻兎一氏が代表理事を務める丸重製紙企業組合は、1951年に辻氏の祖父が手すき和紙職人と共同で出資し創業。高度成長期でも24時間体制は取らないなど職人を第一に思う姿勢は、形を変えて辻氏に受け継がれている。下／辻氏が代表を務める宿泊施設「NIPPONIA 美濃商家町」は和紙の原料問屋であった旧松久才治郎邸の蔵や屋敷を改修。（写真提供：NIPPONIA 美濃商家町）

（注）SDGs (Sustainable Development Goals) / 持続可能な開発目標として、二〇三〇年までに貧困や飢餓、エネルギー、気候変動、平和的社會などの諸目標を達成するための国際連合が主導する活動。一七の大きな目標と、それらを達成するための具体的な一六九のターゲットで構成され、目標の一番目に「住み続けられるまちづくりを」がある。

は、将来的には農業生産法人を立ち上げたいとの構想も描く。

そんな辻氏の信条となっているのは、二〇一五年に国連（国際連合）で採択された「SDGs」(注)の「住み続けられるまちづくりを」だ。

「僕の中では和紙も古民家も電力もすべて本業。地域を守るためのビジネスです。お金を稼ぐだけでなく、地域内でお金や資源を回すという意識が強い。僕は、『SDGs』の達成を通じた住み続けられる美濃のまちづくりを目指しています」

辻氏がまちづくりに携わるようになったきっかけのひとつは、卒業した小学校と中学校が廃校に

なったこと。

「僕も同級生も故郷を思う気持ちには強いのですが、子どもの教育を考えたら学校がない場所には、帰りにくい。ですから、学校をつくる教育事業のビジョンも自分のなかにはあります」

数々の活動を続けるなか、古民家の活用について相談を受けるなど、周囲の意識が変わりはじめたことを辻氏は実感しているという。

「明るい情報があれば、また別の誰かの勇気やあらたな一歩につながるかもしれない。飲食店、雑貨店、シェアオフィスなど古民家を再活用できたら、間違いなくまちは元気になると思います。そして、

美濃を元気なまちにして、子どもたちにバトンタッチしたいです」

さらなる千年先を思い まちのチャレンジは続く

市長の武藤氏によれば、二〇二〇年には外資系のホテルがオープンする予定だとか。二〇一五年に「清流長良川の鮎」が世界農業遺産に登録されたことで、美濃市、郡上市、関市、そして岐阜市が連携した誘客も進行中だ。

周遊、滞在型の観光への扉は、少しずつ開いている。武藤氏の話に明るい未来を思い描きながら辞そうとしたところ、市長室に飾られた花々がすべて美濃和紙でできていることに気づいた。質感のある美しさにほれほれしていると「美濃和紙でつくった、私の名刺を破ってみてください」と武藤氏。とまどいながらも試したところ、力を入れてもしなるだけで、裂け目が生じない。武藤氏の顔が綻んだ。

「正倉院の収蔵品からもわかるように、美濃和紙は千年以上もつほど丈夫なんです」

美濃市ではその手すき和紙の技



術をさらなる千年先に伝えるため、「美濃和紙」伝承千年プロジェクト」を立ち上げ、技術の継承とまちの活性化を図ると武藤氏は話す。後継者の育成や業界の振興に加え、加工等で付加価値をつけた新商品の開発にも補助金を出すなど力を注ぐという。

市長をはじめ美濃市を思う方々の大小のチャレンジにより、あらたな流れが生まれようとしている様は、舟のなかで幾度となくすかれ、コウゾの繊維が組み合ってでき、薄くとも丈夫な美濃和紙づくりと重なった。美濃のまちの最大の誇りは、和紙同様にしなやかだが強い人の心なのかもしれない。